

久下裕利著

『源氏物語の記憶』

—時代との交差—

福家俊幸



2017年5月19日発行
武蔵野書院
A5判 616頁
定価 本体14500円+税

久下裕利氏の新著『源氏物語の記憶—時代との交差』は総頁六一六頁に及ぶ大著である。このような大著の刊行は、僭越な物言いを許していただければ、久下氏の研究にかける旺盛な情熱とたゆまぬ精進を何よりも物語るものであろう。しかも前著『王朝物語文学の研究』の刊行が二〇一二年五月であり、五年足らずの歳月のうちに、この著作が刊行されたのだった（因みに、前書も総頁六六〇頁の大著である）。一方で、この間も久下氏は筆者として多くの著作、論文集を世に送り出してきた。そこには久下氏の論文も収載されている。本務校の教育活動もあった多忙な中で本書に掲載された論文は書かれたということである。久下氏の編集した論文集で世に知られるようになった若手研究者は少なくないが（久下氏の編集はテーマや執筆者の選定にとどまらず、時に執筆者が提出した論文に加筆修正を求めるなど、物言う編者として知られる）、そのようなプロデューサーとしての顔以上に、研

究者として第一線で貴重な提言を重ねているのは畏敬すべきことであろう。そして、久下氏の活潑な学術活動を支えてきたのが本誌「学苑」であることも特筆すべきだろう。本書に収められた十九編の論考のうち、十一編までが初出誌は「学苑」である。前著の新刊紹介で横井孝氏がその著書のすぐれた統一性に言及しておられたが（第八七六号）、久下氏が著書にまとめることを企図しつつ、本誌に一つ一つの論考を積み重ねてゆかれたことは明らかだろう。一著としてまとめられたときに、個々の論文間の有機的なつながりが際立つのも、久下氏の周到な計画の賜物であり、そこには俯瞰的な視点から自己の研究を体系的に積み上げようとするまなざしが感じられる。

さて本書は大きく三部から構成されている。Ⅰ『源氏物語』宇治十帖の記憶、Ⅱ後期物語の記憶、Ⅲ道長・頼通時代の記憶、である。以下にその内容を紹介するが、紙幅の関係もあり、いきおい本

稿の執筆者の関心に左右され、有益な考察のごく一部しか言及できないことをお許しいただきたい。Ⅰは五章から成る。執筆者が注目したのは第一章「宇治十帖の表現位相」、第二章「勾宮三帖と宇治十帖」、第三章「宇治十帖の執筆契機」の三部作ともいべき論考である。久下氏は宇治十帖が一条朝を時代背景としているという観点から、『紫式部日記』との関わりを読み込む。久下氏の論説の特徴は、『源氏物語』と『紫式部日記』とがジャンルを超えて等価なものとしてあり、それぞれの作品の読みが相互の作品の読みを深めていくという構造にあると思われる。通常、「日記」と『物語』の関係はいずれかを主とし、いずれかを従として論じられることが多いが、ここでは対等な関係の中で論じられ、叙述の響き合いの底に作者の思念の深まりが探求されていくという恰好である。

一例を挙げれば、『紫式部日記』の「中務の宮わたりの御ことを、御心に入れて、そなたの心よせある人とおぼして、かたらはせたまふも、まことに心のうちは、思ひぬたることおほかり」という一文は、従来も長男頼通と具平親王女隆姫との結婚について、道長が具平親王に縁故ある紫式部に相談した記述と捉えられてきたが、そこで吐露

された紫式部の屈折した思いが奈辺から来るもの

なのか必ずしも分明ではない。久下氏は常陸宮の娘末摘花の「をこ」物語の創作がかつての主筋であった親王家の人々を刺激し反発を招いていたと見る。さらに久下氏は寛弘六年正月以降の『日記』記録記述の中断から消息的部分への展開の要因を寛弘六年七月の具平親王薨去に探る。この薨去は一方で『源氏物語』の筆の行方にも影響を与え、宇治十帖の新たな展開に繋がっていたと推論する。

具平親王と紫式部との関係は既に若き日具平親王家に出仕していた可能性を説く論や初期の物語の創作が具平親王家でなされていたとする論などが提起されているが、娘達(頼通妻隆姫、敦康親王妻、後年教通妻となった斎宮嬪子)や道長の五女尊子を含めとり村上源氏隆盛の礎を築いた息子師房などの子供達の活躍も含めて、具平親王が後代に残した影響は大きい。具平親王は時代のキーパーソンの一人であり、久下氏の宇治十帖の世界と絡めての立論は、貴重な成果であろう。本書所収の論文全てに当てはまるように、久下氏の論法は文学の成立や表現された世界を歴史的なコンテクストを援用しながら、作者の思念や、作者と享受されたサロンの人間関係、その政治的、文化的な位置からダイナミックに捉え直すところに特質があり、ここでも宇治十帖の世界を新たな視点から照射して

いる。

IIは五章から成る。久下氏の研究の出発点であった平安後期物語の論考を集める。第一章「後期物語創作の基点」は『信明集』に記された信明と中務との贈答に使われた「同じ心」が彰子中宮のサロン間で共有されたことを説きつつ、『信明集』享受を出発点として『源氏物語』から大式三位と定頼との贈答歌、『更級日記』、『堤中納言物語』、『花桜折る中将』へと表現が連鎖する状況を浮上させ、ジャンルを越境する、一つの表現史を辿る。第五章「物語の事実性・事実の物語性」は事実にしる虚偽にしる物語の題材を収集する上臆女房も含む女房集団のネットワークの介在を説き、その集団が物語創作に参画するようになったことを説く。

サロン文学としての平安文学を考えると、この視点は有益であろう。

IIIは八章と【付載】論文一編から成る。第一章「生き残った『枕草子』」は『枕草子』の生成とその後、時代の網の目から考究するもので、時代の享受を人間関係の網の目から考究するもので、時代の中でこの作品がいかに受け継がれていったか(生き残ったか)を論じ、当該作品の価値を享受史から位置づけた成果である。第六章「道長・頼通時代の受領たち」、第七章「大宰大式・権帥について」、第八章「王朝歌人と陸奥守」はいずれもこの時代の新興勢力であった受領がそれ

ぞれの任国や置かれた環境によって付帯していた特質を文学、史学のそれぞれの領域の博捜から導きだし、作品の新たな読みに還元している。

以上浩瀚な書のごく一部をなぞったにすぎない。久下氏の論文は多くの文学・歴史資料を考察の対象とし、その視野の広さは際立っているが、先行研究への目配りも周到である。最新の論考に至るまで、久下氏は実に多くの論文に眼を通し、若手からさらに久下氏と方法論を異にするであろう研究者の論文まで注に引用している。このことは研究歴が長くなるほど怠りがちであり、教えられる。さらにひとこと。例えばIII第三章「その後の道綱」で、久下氏は道綱が源頼光の婿であったことに言及し、さらに頼光とその父満仲一統は花山天皇出奔事件や伊周流罪事件に常に関わった武装集団であったと述べる。『蜻蛉日記』には内裏の賭弓で射手として活躍する少年時代の道綱を点描しているが、その記述にも触れつつ、道綱の武闘派的な資性を久下氏は示唆的に述べている。本書は細部に至るまで、このような独自性の高い指摘と着想がちりばめられている。尽きせぬヒントを与えてくれる豊潤な書であり、細部まで気が抜けな

い、一筋縄ではいかぬ手強い書でもある。

(ふくや としゆき 早稲田大学教授)